



女ぶらりと ヨーロッパ ケチケチ旅行

中村陽子



学校の先生を辞めた。思えば**25**年間夢中で駆けてきた。

立ち止まろう。そして、少し休もう。

自分はどんな働きをするために生まれてきたのか静かに考えてみたくなった。

第2ステージの自分をスタートさせるためのインターバルは、経費約30万円の「30日ケチケチヨーロッパ放浪」である。格安復路航空券とフランスレールパスを持ち、出発した。ミシェランの地図とトーマスクックの時刻表で、行く先を決めた。

行き当たりばったりで不安と闘う毎日だったが、美しい風景や人の温かさに触れて元気をもらい、何とか30日目最終日を迎えた。日々の感動を日記に、心を引かれた景色をスケッチに綴って持ち帰った。南フランスの小さな田舎町を訪れ、数百年の時の流れに魅せられた。大きな河や湖のそばで静かに時を過ごした。スペインの小さな町と出会い、冷たい地中海に潜った。山の湖を見ようと2500mのアルプスに挑み、自然の厳しさと向き合った。新しい友達もできた。



その中で、自分らしさと豊かに楽しく生きる工夫の素敵さを感じ取った。自分らしさを綴ったこの作品は、見るたびに自分自身を勇気づける。「大丈夫。強い思いがあれば必ず願いは叶う。」と、新たな人生へのファイティングスピリッツをくれる。

2004年8月 中村陽子

6月9日「トラベルの語源はトラブル」」（1日目）

前日は夜中まで、一ヶ月間留守をしても大丈夫なようにあれこれと準備をし、寝たかと思ったら朝だった。朝6時過ぎ予約していたタクシーで空港へ向かった。久しぶりの海外旅行だし、案内してくれる添乗員さんもないし、気を張って頑張ってるという感じだ。

チェックインの時に、日本にしか無い小型ガスボンベが問題になった。ケチケチ旅行には欠かせない携帯コンロ。ボンベがないと持って来た意味がない。ヨーロッパでも売っている大型のボンベはかさばるし...と考えあぐねた。「ガスを抜いて缶だけならいいか」と切り返した。「ちょっと待ってください。わかるんですけどね。ボンベを乗せるわけにはいきませんので。」係の人は困っている。チェックインする人が続々と列を成す。しかし、コンロは、ヨーロッパでご飯を炊いたりコーヒーを湧かしたりする必須アイテムだ。ボンベがなければ、これからの旅に大きく影響する。ケチケチ旅行の危機だ。必死にねばった。「任務はよくわかります。でもこのボンベがないと私はとても困るのです。お願いします。」



私は食い下がった。しばらくやりとりが続き、空港外でガスを抜き、缶として持って行くということで治った。それから、おりゃーっと空港の外まで行きガス充填機を使って小型ガスボンベのガスを移し替え、元の場所に戻った。時間との勝負だ。どこかでチッチッチと時計の効果音が鳴っているようでかなり焦った。そして、無事搭乗することができた。

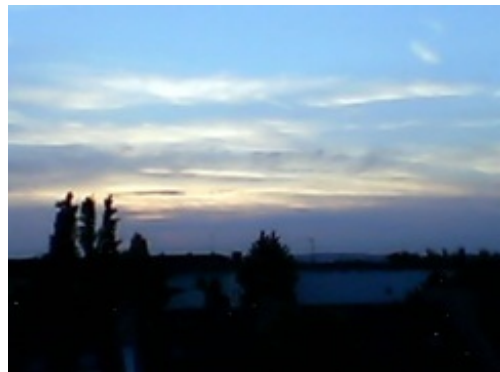
ソウルに着いた。帰りのチケットは30日後である。30日間帰れない旅に出るのだと思ったらパニックになりそうだ。パリまで約10時間。この調子で大丈夫かと不安でたまらなくなった。「行きたいところがある。どんな場所にどんな人に出会うのか予想もつかないことが待っているから、行くのだ。」と自分を繰り返し説得して気持ちを切り替えた。勤務した25年の間に積もったストレスからか、はたまた更年期からか、時々パニック症候群の自覚がある。30日のケチケチ旅行には、それに打ち勝つ精神力が必要である。その後も不安は時々顔をのぞかせたが、「負けない」とその都度闘った。

飛び立ってからずっと泣いている赤ちゃんがいた。静かになったなと思ったら、スチュワーデスさんが抱っこしていた。抱っこして少し揺すりながら、機内の乗客の様子を見て歩いている。赤ちゃんはスチュワーデスさんの胸に頭をつけて安心しているようだ。優しい心が伝わるのだなと思った。しばし私の不安もどこかに消えた。

6月10日「行き当たりばったりの始まり」(2日目)

PM6:00シャルルドゴール空港に着いた。疲れていたけれども、荷物をしっかり持ち気を引き締めた。案内表示に目を懲らした。パリ北駅行きを探した。切符を買うのも初めてだから、かなり時間はかかった。時刻も遅いことだし、北駅付近は大きい町なので、今からホテルを探す自信はない。ホテル代も高そうだ。迷った末、二つ手前の小さそうな町Bourgetに泊まることにした。

知らない駅に降りた。不安だけれどとにかく歩いた。降りてみたら、活気のある町でたくさんの小さなファーストフードの店があり、労働後のおじさんたちでいっぱいだった。通りを黙々と歩いてホテルを探した。勇気を出して入った最初のホテルは満室だった。がっかりして次へ向かって歩いたら、咳が出て吐きそうになった。緊張と車の排気ガスのせいかなと思う。夜8時過ぎだし、今日泊まる場所はまだ決まっ



ていない。やけくそだ。通りすがりのおばちゃんに「Je chercher hotel.」とあやしいフランス語で聞いてみた。おばちゃんは、親切に通りの向こうを指さして「ああ〇〇ね。(ホテルの名前らしい)ここをもうちょっと行くとあるよ。こっちだよ。こっちだからね。」(たぶんそう言った)と言うから、お礼を言ってそちらへ向かった。見つけた。そこは三つ星のホテルで65ユーロだ。仕方がない。もう遅いし、はじめから安宿を探すのはあきらめて、そこへ落ち着いた。

シャワーを浴びて、10時頃食べ物を探しに外に出た。愛想なしだが人のよいおじさんのドネルケバブ(大きなパニーニの中に削いだ羊のローストと野菜とフライドポテトが山ほど入っていてチリソースとサワークリームの味付け)は、とてもおいしかった。

ちょっと蒸し暑かったけれどシーツにくるまって眠った。時々目が覚めてまた不安になった。行き当たりばったりの旅で心配だったから、一晩心地よく眠らせてくれたその部屋に感謝した。

6月10日 パリ郊外Bourget...宿65€ Kiriod

6月11日「格安ホテル探しに初めての挑戦」(3日目)

時差ボケもあまりなく一日が始まった。ホテルの窓から見えたあの巨大ロケットはいったい何だったんだろうか...という思いを残して、le bourgetにさよならした。10日使えるフランスレールパスは強い味方で、切符を買わずに電車に滑り込める。

パリの北駅に着き、インフォメーションを探した。インフォメーションには何人が並んでいた。自分の番が来て、ちょっとドキドキしながら「一泊30~40ユーロの部屋を探しています。」(値段はメモ用紙に書いて見せた)と言うと、「ないですよ。(無理という風)54ユーロですね。(地図を見せて)現在地はここ。こう行ってああ行って...。」と思い切り熱く説明してくれた。後ろにも並んでいるけれど、一人一人丁寧に对应してくれる。待っている人も急かさない。気長なもんだなあと感心した。それで、その値段で妥協しそこに決めた。ケチケチ旅行2泊目、30~40ユーロの宿は難しいのかなあと、やや自信喪失気味でそのホテルへ向かった。



カルネ(地下鉄の回数券10枚=11ユーロ)を買ってCorentin cariou駅へ行き、そこから歩いた。Canal de l'Ourcqの近くのとてもかわいいホテルだった。

いいところを紹介してもらったとつくづく思った。運河沿いに公園が広がり、豊かな自然の中に現代的な建物と球体の映画館がある。東京のお台場的な雰囲気似ている。旅の疲れを癒しこれからの作戦を練るため、ここに3日間滞在することにした。



午前中にホテルに収まり、少し休んでChanger(両替)と買い物を出かけた。ワイン アプリコット 洋なし トマト チーズ パン サラミ オリーブを少しずつ買った。量り売りだし、安いし、買いやすいので感心した。ちょうど、果物の豊富な時期に来ることができて、よかったと思った。10時頃にやっと日が落ちるパリで遅い夕食をとった。メニューはもちろん手作りサンドである。



6月12日「ムフタル市場で見た職人技」(4日目)

早朝5時起床。朝陽で運河がキラキラと輝いている。じっと眺めた。本当にきれいだと思った。あと二日間の拠点が決まっているからか、平穏な気持ちでいられる。バゲットに切り込みを入れ、トマトとフロマージュ(チーズ)オリーブ サラミを挟んで食べた。問題の携帯コンロで湯を沸かし、コーヒーを入れた。携帯コンロは素晴らしいアイテムだとつくづく思う。

今日は、ムフタル市場へ行く。タベ、パリの地図を見ながら決めた。地下鉄でCorentin cariou駅からCensier Danbenton駅へ向かった。降りると1分もしないうちにmarcheマルシェ(市場)に着いた。マルシェはすばらしかった。きれいだった。山のように積まれた色とりどりの新鮮野菜や海産物がずらりと並んでいる。日本の市場ももちろん味があって好きだが、また違って色鮮やかで華やかな感じだ。



赤や黄色の野菜の中に緑の野菜をちりばめたり、お互いを引き立てるように配置したりなど、ディスプレイの仕方がうまいから、おいしそうに見えてつい買いたくなる。市場のおじさんは粋だ芸術家みたいだと感心した。坂を登ってパンテオンへ行った。フランス革命で亡くなった人をお祀りしている場所へ行くと、胸が痛んで入れなかった。パンテオンを出る時に、その人々の冥福を祈りたくなって少しの間目を閉じて祈った。



ノートルダム寺院の方へ歩いていると、また市場に出会った。ムフタル市場と比べると少し安価のようだ。マイナーな市場は、ケチケチ旅行の味方だと思った。

たくさん歩いてお腹がすいた。ノートルダム寺院近くでドネルケバブを買い、セーヌ河沿いのベンチに腰掛けて食べた。市場で買ったラディッシュに便利アイテムのマヨネーズをつけて食べた。新鮮な生野菜は体が欲していることもあって、とてもおいしい。安いと思って買ったのだけれど、二束もあった。しばらくラディッシュが続きそうだ。



目の前にあるセーヌ河を遊覧船がゆっくりと通っていった。

帰りにホテルの近くのパン屋さんで、バゲットとクロワッサンを買った。ずいぶん歩いて疲れたせいか、そのまま夕食も取らず朝まで寝てしまった。

6月13日「観察力を養え」（5日目）

部屋で朝ご飯をゆっくり食べた。バゲットにチーズ サラミ オリーブとマヨネーズ、もちろんラディッシュをはさんで食べた。温かい卵スープも作った。コーヒーもおいしかった。神様に感謝したい気持ちになった。

9時半過ぎに今日の予定を考えた。ふと窓の外を見ると、空っぽの買い物袋を持った人々が向こうへ歩いて行く。もっとよく観察すると、向こうから野菜や果物でいっぱいになった買い物かごや袋を持った人々がやって来る。きっとこの先にマルシェがある。しかも歩いていけるところに...ピンときた。

さっそく人通りのある方へゆっくりと歩いていくと、案の定マルシェがあった。昨日の市場より活気があり、山ほどの果物や野菜をワシワシと売っている。ちょっと興奮して見て回り、ネクタリンを1kg買った。値段は日本より遙かに安い。何だか得意気になった。人の動きや状況を観察するって大切だ。いろんな情報をキャッチできる。



それから川沿いをゆっくり歩いた。広い近代的な公園につながっていた。川岸にベンチが並んでいる。そこへ座って絵を描いた。時間を気にせずゆっくりと描いた。何年ぶりかな...こんな風に景色を眺めて絵を描くなんて...。ゆったりと時間が流れる。

それから作ってきた弁当（特製サンド）と温かいコーヒーの昼食を楽しんだ。日本から持って行ったもう一つの便利アイテムは、保温できる小型水筒である。持ってきてよかった。



6月14日「☆なしホテルの味わい」(6日目)

フランスレールSNCFでオルレアンへ向かう。愛に満ち、勇気をもって行動したジャンヌダルクに会いたかった。ジャンヌダルクの息づかいを感じるその町に行くことで、私もその勇気をわけてもらえるような気がした。



パリからオルレアンへの車窓は、北海道に似ていた。どこまでも麦畑が続き、所々の集落には必ず教会の高い塔がある。赤茶色の屋根に白い壁、窓際や庭の色とりどりの花が見えた。石の文化ヨーロッパの家々は、とても頑丈そうできっと百年前もそこに建っていたのだろうと思った。どんどん新しい家を建てるのとは違って、その家の中には、数々の歴史と先人の知恵が詰まっているのだろうなとも思った。



オルレアンに着き、インフォメーションを探したけれども開いていなかった。途方に暮れて歩いていたら、ジャンヌダルクの銅像のある広場に出た。馬にまたがり剣を振りかざす女性ジャンヌダルクが広場の中央に雄々しく居た。すぐ近くまで行って見上げた。私はここで勇気をもらおうと全霊を傾け、黙って見つめながら、しばらくじっと立っていた。インフォメーションは閉まっているし、今日泊まるホテルを探せずに歩き回った。ロワール河に出た。静かに悠々と流れている。遙か向こうには、石の橋や古城跡が見える。ベンチに座り少し休んで気合いを入れ直した後、また重い荷物をゴロゴロと引いてホテルを探した。

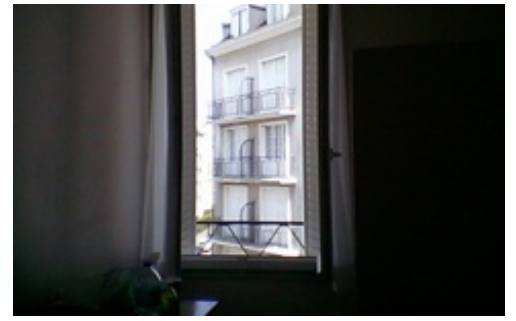


駅近くのダウンタウンを歩いた。ホテルはいくつかあった。格安のホテルはどこかなと勘を働かせる。☆なしのホテルは、よくレストランの二階にある。それを目印に「Hotel de paris」に入った。「Vous avez une chambre libre.(空き部屋はありますか)」と聞いた。「ある」と言うので、「Quel est le prix?(いくらですか)」とまた聞いた。27ユーロと聞いて、その安さに目を丸くした。いやいや待て。耐えられない部屋では困るから、見せてもらった。

廊下は暗い。電気はある。壁紙ははげかかっているところ



がある。歩くとギシギシ音がする。シャワーがある。奇跡的にバスタブがある。トイレは廊下にある。鍵はかかる。総合的に考えて耐えられると判断し、2泊することにした。初めて泊まる☆なしのホテルだ。少し古いけれど、シンプルでかわいい。しかし、夜は怪しい。トイレが廊下だから、行こうかどうしようか迷いながら我慢した。廊下の音に耳を傾け、誰もいないことを確認してからソロリと鍵を開け、忍者のようにささっとトイレに入りまた戻った



。

6月15日「元気をもらおう」（7日目）

朝から何だかホームシック。涙が止まらなかった。かなりの緊張は、自分のキャパを超えているのだろうか。部屋の中に居ると余計にそうなるのかな。



気を取り直して、出かけた。ホテル近くの手芸屋に入ってみた。店のおじさんの笑顔は、とても優しそうだった。落ち着いて話ができる雰囲気だ。ビーズで作った花がとても素晴らしかったので、「Tres joli. (とてもきれい!)」と言った。おじさんは笑顔でまた他の作品を見せてくれた。奥様に贈った花嫁のブーケに感動した。おじさんのやさしさと一緒に、かわいいチョーカーとブレスレットを買った。友人へのお土産だ。きっと喜ぶだろうなと友人のことを思い出したら嬉しくなった。おじさんのお陰で気持ちの転換ができた。心から感謝したから、笑顔を取り戻して「Au revoir (さようなら) .」と言えた。

ジャンヌダルク広場近くの大聖堂の横で、ベンチに座り絵を描いた。かなり時間がかかったけれど、水筒に持ってきた温かい紅茶とサンドウィッチの昼ご飯を楽しみながら、頑張っ



6/14~15 ...宿27€ hotel de Paris

6月16日「小さな町の写真屋さんとの出会い」(8日目)

レンタカーで移動する。昨日のうちに友人と苦労して予約していたので、さほど時間をかけずに出発できた。ロアール河沿いの古城を見たかった。千年二千年という昔の息づかいに触れたかった。運河、崩れかけた古城跡、道路も地図も車の運転も見知らぬ土地で初めての経験だ。不安で不安でたまらなかったが、見たい触れたいという熱い思いが勇気と元気の源になった。



Michelin のFrance地図とにらめっこ。小さい文字で書かれた「D951」などの国道(赤)県道(黄色)の番号を確認し、進行方向の表示板に集中した。時々見逃して行きつ戻りつ迷い迷い行った。当てのない旅だから途中変更してもよいし、着いたところで泊まればいいさという楽な気持ちでいるよう努めた。どこまでもまっすぐな道の両側は、一面の麦畑だった。地平線まで続いていた。



運河に127の橋が架かっているというMontargisに着いた。運河に花を積んだ小舟を浮かばせている。足を止めて絵を描いた。運河のある風景は、何となく空気がゆるりとしているように感じる。じっと見つめ絵を描いていると心が落ち着く。



Montargisから2時間ほど走った。古城にはまだ行き着かない。小さな町に着いた。そろそろホテルを探さないと夕方になってしまう。ホテルを探すけれど見つからず途方に暮れた。道沿いの写真屋さんに入り、道を尋ねた。「Pardon monseieur.」「Je chercher hotel.」「pas cher(安いホテルがいい)」あとは、身振り手振り時々英語時々フランス単語で頑張った。ご夫妻で一生懸命考えてくれて、「あそこがいいんじゃないかしら。」などと話したり電話で尋ねたりしながら、一軒のホテルを教えてくれた。あまりに親切に対応してもらって嬉しかったので、お礼に折り紙で鶴と風船を折ってプレゼントした。実際に風船を折



って見せたらとても喜んでくれた。お礼を言って出ようとしたら、「2、3分時間はあるか？」と言い、自分の仕事場を見せてくれた。奥の部屋へ案内され、自作のアルバムを見せてくれた。よく写真屋で作るアルバムなのだが、それはそれは素晴らしかった。ご主人の手の込んだクラフトと様々な写真はオリジナリティに富み、被写体のよさをもっと主張しようとする工夫が見え、感動を与える作品になっている。心のこもった温かい作品に感動し、少し涙が出た。心から「Nice to meet you.」と言って握手した。

ホテルは昼休み中で、開くまで(5時頃)運河沿いを散歩した。クルージングしている船の宿泊所があり、のんびりとシャペンを開けている老夫婦達がいる。大きな大きなプラタナスの並木。葉が風に揺れている。鳥の音が響いている。空は青く、白い雲が浮かんでいる。とても穏やかな時間が流れた。

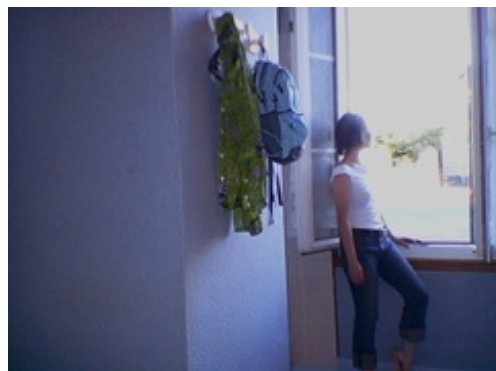


・・・ホテルは開いたが満室だった。

また不安になったが、とにかくしばらく走った。

Office de tourisme(旅行者のためのインフォメーション)を見つけ、ほっとした。もう午後6時過ぎだけど開いている。「藁をもつかむ思い」がよくわかった。入ると女性が一人いて、とてもとても親切に対応してくれた。希望料金で環境のよいホテルを探そうと、あれこれ電話で交渉し、その後たくさんのお勧めポイントのパンフレットをくれた。間違えずに行けるよう地図にわかりやすく目印をつけてくれた。その人の親切に心から感謝した。お礼にまた鶴を折って渡すと、とても喜んでくれた。

BriareにあるPon canal近くのホテルに収まった。



下のレストランで食べたレバーソーセージの煮込みは、とてもおいしかった。ワインも飲み放題、お任せコースの9ユーロ(約1200円)は安い。それから、長かった一日を振り返ることも次の計画を立てることもせず、がっくりと寝てしまった。





6/16~18

Briare

...宿32 Hotel de Midi

6月17日「ロワール河沿いの公園でぼんやり」（9日目）

素晴らしい晴天である。食材を持って、ロワール河沿いの芝生公園までゆっくりと歩いた。行き交う人々は、皆のんびりと歩いている。歩調はゆっくりで話しながら歩いている。運河のクルーザー客もここPon canalでゆっくりと散策している。



公園に入ると、一人の老人がいた。ベンチに腰掛け動かない。いつまでもいつまでもそうしている。私もベンチに座り、何もせずあちこちをぼんやりと見た。

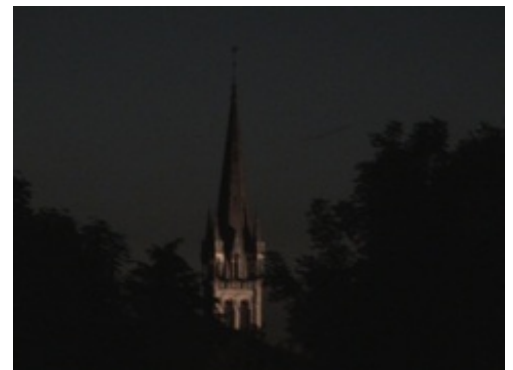


ロワール河沿いの広い広い土手の公園には、リンゴのような実のなる木やチェリーの大きな木がある。子供が、木の下で落ちた実を拾っている。木に登ってその実に手を伸ばしている。なかなか届かない。そんな光景をほほえましく見た。子供が去った後、私も立ち上がり、ブラックチェリーの食べ頃の大きな実を見つけた。でも、木が大きく高いのでとうてい届かず、未練がましくいつまでも見ていた。



ベンチに座って、サンドウィッチを作った。絵を描いたりハガキを書いたり、友人とドミノをしたりして4時間近くもそこで過ごした。今日は、移動もないし宿も決まっているから安心だ。

夜、ライトアップされているpon canalまで散歩した。運河に映るライトがとてもきれいだった。涼しい風に吹かれながら、虫の声を聞いた。



夕飯に日本から持ってきた米を炊いた。米は、久しぶりだ

。炊くと言ってもキャンプの要領でなかなか難しい。焦げないように、芯が残らないように慎重に最後の仕上げを待った。少し焦げのにおいがしてきたところで火を止める。絶妙なタイミングである。奇跡的にうまくいった。興奮しながら、インスタントのみそ汁とふりかけで食べた。お腹いっぱい食べたら、例のごとく自動的に寝てしまった。



6月18日「ピンチ！」（10日目）

Pon canalを発った。レンタカーを運転し、Coullonsまでの田舎道を走った。古城を見ながらオルレアンに帰ろうとコースを考えていた。広い小麦畑の間の高い並木道を通り走った。どこまでも同じような道が続いた。途中、いくつか小さな町と教会の塔が遠くに見えた。地図の道路の番号がなかなか見つからず、どこを走っているかもわからなくなった。心細くなった。太陽の位置から方角を考えて、軌道修正しながら走った。



奇跡的にCoullonsについて、カフェで一休みした。結局、道を探せず時間もずいぶんかかったので、予定を変更した。車を返す予定の午後6時に間に合わなかったら大変だから、生活感のある国道を走るのをあきらめて、ハイウェイを一路オルレアンに向かった。



オルレアンの町で友人とはぐれた。1時間以上たつのに両替から帰ってこない。店の前に路上駐車しているから、大きな車が横をソロソロと通ると気になって小さくなった。車を移動させたら余計わからなくなってしまったから、車を離れるわけにもいかない。事件に巻き込まれたのじゃないかしら、事故にあつて病院に運ばれたのじゃないかしらと、いろいろ考えたら泣きそうになった。パニックになりそうだ。どうしたらいいかしら、大使館に行かなくちゃならないかしら、家族に電話するのはまだ早い、そうだ警察だ...と心の中がぐちゃぐちゃになった頃、友人はぶつぶつ言いながら、疲れた顔をして帰ってきた。何しろよかった。ほっとしたら、体の力が抜けた。車を返して、オステリッツ駅へ列車で向かった。



■オルレアンからオステリッツ駅へ向かう列車の中の1シーン

オルレアンからオステリッツ駅へ向かう列車で、隣に三歳くらいの男の子とお母さんが座った。お母さんはやがて眠ってしまったが、男の子は電車の絵本を見ながら数を数えたり何やらお喋りをしたりしていた。私の様子も気にかかるようで、時々ちらちらとこちらを見た。しばらく窓の外に流れる景色を見ていたけれど、その男の子は退屈そうで立ち上がったたり、ママをさわったり

していた。私は、手帳を破り折り紙の風船と鶴を折って見せた。するとボールペンを貸してと手を出した。そして、風船に小さい点を書いてサイコロにした。そんな発想をする子供をかつて見たことがなかったので驚いた。面白くなって、手帳ですごろくとコマを作り、二人で遊んだ。折り方にはまだ興味を持ってない頃だが、すごろくで数を数えるのは気に入ったらしい。

列車がパリに到着する頃、男の子は、鶴や風船 サイコロ すごろく コマをポケットに大切にしまい込み、ママを起こした。「ママ、もうすぐパリだよ。起きて。ねえ。」（たぶんそう言った）そして、うつむき加減にはにかみながら「...a bientot...（またね。）」と言っている。そうか！と気づいた。ちょっとシャイな男の子が、私にお礼を言ったのだ。私が、心から笑顔で「A bientot.（またね。）」と言うと、男の子は自分のポケットをポンポンとたたき「Merci（ありがとう）」「Merci beaucoup（いろいろとたくさんありがとう）」と言った。三歳位の子どもが、お礼の気持ちを自分から表せてすごいなと感心した。別れ際に何とか自分の気持ちを表そうとするその小さな男の子に心を打たれた。そして、それは忘れられないシーンとなった。

夜9時56分発の port bou行き夜行列車に乗るから、腹ごしらえをし、駅のホームに座って待った。1. 2時間待つのは慣れた。待っている間、日本ではほとんど飲まなかった甘い炭酸飲料（いかにも体に悪そうな）を、勢いで飲んだりした。「これを飲んだら...。」なんて、ちまちましたことに気を遣わなくなってきたみたいだ。旅の空だからかしら...

コンパートメントが空いていたら横になれるという考えはあまかった。そろそろバカンスシーズンに入り、北から南へ民族大移動が始まっているらしい。シートをリクライニングし、体をあちこちよじりながら一夜を過ごすことになった。列車内は寒いくらいで、キャンプ用の綿のシュラフにくるまって寝た。列車はものすごいスピードで南フランスへ走った。

6月19日「世界遺産のある町」(11日目)

早朝6時Narbonneナルボンヌで下車した。シートはまあまあだったが、体がやや凝っている。風は冷たい。ナルボンヌ駅のカフェでCarcassonneカルカッソンヌ行きの列車を待った。あらかじめトーマスクックの時刻表で乗り継ぎの列車を確認しているから安心だ。

カルカッソンヌはどんな町なんだろう。早朝のすがすがしく冷たい空気に、気を引き締められた。2000年前の古城(世界遺産Cite)に對面することを思うと、神聖な気持ちになった。カルカッソンヌの駅周辺で、ホテルを探した。駅前にはホテルがいくつもあって探しやすい。ちょっと裏通りに入ったところに小さいホテルを見つけた。☆は一個ついている。一泊27ユーロと言うから嬉しくて、こっそりガッツポーズをした。朝早いけどホテルの部屋に収まることができた。荷物を置いて、着いたときから気になっていた駅のすぐ前の運河沿いを散歩した。



運河沿いにクルージングボートが停泊している。デッキでゆっくり朝食をとっている夫婦がいた。素敵だなと思った。



並木のある土手にベンチがぽつんぽつんと置いてあった。しばらく歩いてベンチに座った。わざと古いベンチに座っていたら、犬を連れて散歩している人が「向こうにもベンチがあるよ。ここは壊れかけているから嫌でしょう。あちらがいいですよ。」(たぶんそう言った)と話しかけた。



フランスに来てから、あいさつが徹底していることに驚いていた。道をすれ違う人はもちろんのこと、コンビニでもスーパーでも店に入るときは「Bonjour!」出るときは「Au revoir!」と必ず言う。小さい声、はにかむ声、弾んだ声、時には身振りと口パクであったりいろいろであるが、一人一人に必ず言う。私もすっかりそれに慣れ、躊躇せず言葉を交わせるようになって来た。

だからその人にも「Merci.」と笑顔で心から言えた。

運河から商店が連なるメイン通りの方へ歩いた。賑やかでいろいろな店があって楽しい。カラフルなファッショングッズ、ヨーロッパらしい家具や装飾品、生活用品などウィンドウショッピングしながら進んだ。



広場に突き当たると、何と！そこに私の大好きなマルシェがあった。ここは土曜日にマルシェが開かれるらしい。色とりどりの果物や野菜、香辛料、パンやハムソーセージ、花や生活雑貨などがずらりと並んでいた。



興奮して店という店の品物や値段をチェックして歩いた。そして、お気に入りのシェリー（ブラックチェリー）を買った。1キロ1.5ユーロ（約200円）なんて気絶するほど安い。自分で手づかみして袋にいっぱい入れて計ってもらった。



何だか、小さな幸せをいっぱい詰めているようで嬉しくなった。白熱した後は、夕べの夜行で疲れたせいか、ホテルに戻ってがっくりと寝てしまった。



6月20日「2000年前の息づかい」(12日目)

今日は朝から曇り空。朝食はカフェでクロワッサンとカフェオレにしようと思った。マルシェのあった広場に行ったが、今日は日曜日でほとんどの店は閉まっていた。おいしそうな洋菓子の並んだショウウィンドウに目がとまった。そのカフェに決めた。



外の席でクロワッサンとカフェオレをまさに食べようとした時、急に雨が降ってきた。どうしよう...中に席はないようだし...と思っていたら、店主が二階に案内してくれた。らせんの階段を上がっていくと、そこはとても素敵なインテリアの部屋だったので、驚いてしまった。その素敵な空間でゆっくりと朝食をとった。まだ雨は止まないし、思い出にその部屋の絵を描いた。



雨が止んだので、Cite (シテ) まで歩いた。Citeの中は、観光客があふれていて意外だった。世界遺産だけあって、インフォメーションには各国の観光パンフレットが用意されていた。レストランや土産品店の並ぶところを避けて、外壁近くをゆっくりと歩いた。そこは静かで別の空間だった。しばらくの間一心に城壁の絵を描いた。



外壁から町を見下ろした。米粒のように見える茶煉瓦と白壁の建物が無数に広がり、その間に豊かな緑がある。その向こうには緩やかな山々が連なっている。心の中のあらゆる物を吹き飛ばしてしまうような強い風が、絶え間なく吹いている。2000年前もこの風は吹いていたかしらと思った。あまりの広大さと美しさに感動して涙が出てきた。遠い町カルカソンヌを訪れることができ本当によかった。この町を守っている人々や自然の営みすべてに心から感謝したい気持ちになった。



6月21日「お土産は石けん」（13日目）

日曜日の街は静かだった。夕食は、米を炊いた。4日間の滞在だから、スーパーで食材も買った。ワインは、1リットル0.9ユーロ（約120円）だし、ケチケチ旅行の強い味方だ。レストランで食べるのもよいが、自分で作ると生活感があって、とても楽しい。起きたら寝るまで、工夫の連続だ。だから楽しいのかも知れない。



素晴らしい晴天。サイクリングの予定だったけれど、今日はレンタサイクル屋は店休日だった。昨日、どうしようかと迷っていたお土産の石けんを、どうしても買っておきたくなったから、予定変更して、また今日もCiteまで歩いた。



たくさんの香りの石けんがむき出しで、ずらりと並んでいる。一つ一つにおいを嗅いでいたら、混乱してきたのでローズとラベンダーの香りを選んだ。きっと手を洗うたびに、カルカッソヌのCiteのことを思い出せるだろうと思って、石けんにこだわった。その他、絵はがきとチョコレートも買った。



Citeのそばの川'Audeから橋を眺めて絵を描くつもりだったけれど、石けん選びに白熱した後、おいしいサンドウィッチを食べたら眠くなった。朝から、両替と投函でla poste（郵便局）に行き、そのままCiteへ歩いたので疲れて、絵も描かずもうろうとしながらホテルへ帰って寝てしまった。

起きたら午後6時だった。Mono prix（スーパー名）で少し買い物をした。今日の夕飯は、生ハム入りのサンドウィッチだ。チーズもビールも安いので嬉しい。ミントチョコのアイスクリームを食べながら帰った。今夜はあちこちでライブがあるらしい。スピーカーから音楽が流れ、カフェは外にたくさんの席を出している。



夕方、運河沿いを歩き、思い出のベンチの絵を描いた。またいつかきっと、このベンチに座ろうと思った。



6月22日「スペインヘリサーチ」(14日目)

経費節約のために、物価の安いスペインに明日から5日間滞在することにした。それで、今日はリサーチだ。早朝4時半起床。5時41分カルカッソンヌ発 port bou行きの列車に乗った。Port bouはフランスからスペインに入って最初の駅だ。列車は、カルカッソンヌに来る時にオステリッツ駅から乗った夜行列車だった。今日の列車は、バカンスに入った学生や家族連れでいっぱいだった。みんなへそ出しルックで大きな荷物を持っている。まだ朝早いから、ほとんどの人が体をよじらせたりシユラフにくるまったりして眠っている。一眠りした後、持ってきた手作りサンドを食べた。その頃には、車窓に地中海が広がった。郷里の海を思わせる風景だ。絶壁の上にスペインらしい茶煉瓦と白壁の家が続いている。



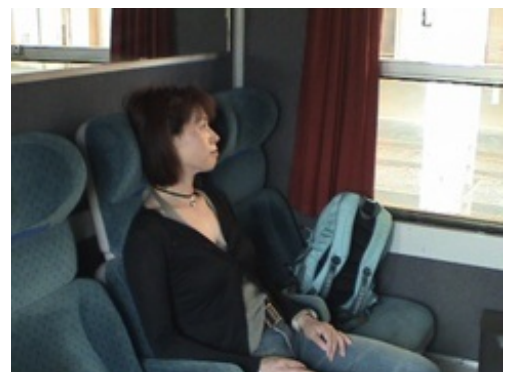
Port bou駅に降りた。曇り空で、空気は温かく少し湿っている。5日間泊まるには少し寂しいところだなと思った。午前9時になってもインフォメーションが開かない。海岸沿いのカフェでしばらく待ったが開かない。何だか寂しい街だし、もう少し先に行くことにした。



地図を開き、直感でLlancaに決めた。

駅に着き、海岸まで通りをまっすぐに進んだ。海水浴グッズが店頭にあふれている雑貨屋やお土産品店を過ぎると、目の前に地中海が広がった。人影はまばらで静かだ。例のごとく、また、行き当たりばったりだったけれど、それがとても素敵なリゾート地で気に入ってしまった。駅の近くのホテルに明日から5日間(27ユーロ×5)の予約を取った。これで安心だ。

ほっとしてカルカッソンヌへ戻ることにした。Cerbere行きの列車がなかなか来ない。やっと来たと思って乗ったら、逆方向でどんどんカルカッソンヌから離れてしまった。車掌さんに尋ねてようやくそれが分かり、次の駅でまた乗り換えることになったが、そこまでがとても遠く感じた。随分待ってcerbereに着いたけれど、また1時間半の待ち時間。今日は待ち時間が多くて疲れた。Narbonne(ナルボンヌ)に着いたら

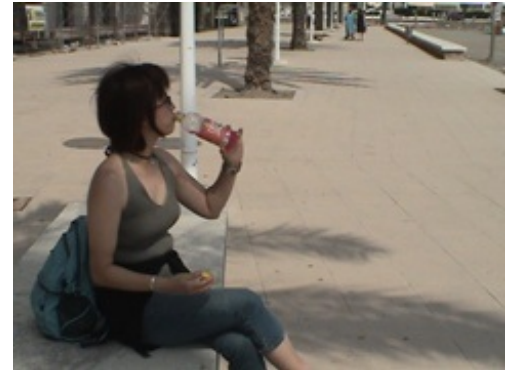


らCarcassonne(カルカッソンヌ)行きにまた乗り換える。車窓から、ピレネー山脈が見えた。一面にブドウ畑、反対側には深い山間の向こうに地中海が見える。一日移動の日だった。たっぷり疲れて、レストランで食事した。メニューがわからなくて困ったので、おまかせメニューにした。お腹いっぱいすぎて苦しんだので、次からコースメニューはやめようと思った。

6月23日「セルベツソとトルティーヤ」(15日目)

朝からゆっくりと寝坊をした。

今日はLlanca (ジャンシャ) に発つ日だから、ちょっとバカンス気分で水着やキャミソール、ビーチサンダルを買った。まさかそんな暑いところへ行くとは思ってもよらず、速乾性と機能性を重視したパツとしない洋服2~3枚しか持ってきていない。リサーチの時、ビーチの様子を見ていたから、これは是非用意しなくちゃと思った。



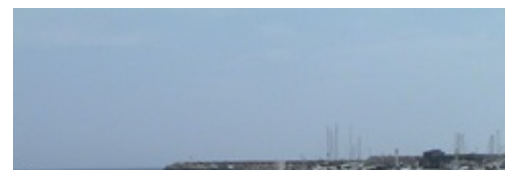
さっさと買い物を済ませ、午前11時41分発の列車に乗った。時刻表で調べたから、乗る列車も決まっているし、昨日のような失敗の他は何も心配はない。嬉しかった。列車は、神業的接続であっさりジャンシャに着いた。



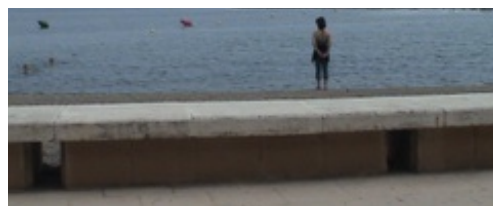
予約していたホテルに行くと、昨日の素敵なお兄さんが出てきた。そのお兄さんは家族経営のレストラン兼ホテルでウェイターをしている。お母さんはウェイトレスでお父さんはコックを担当している。お兄さんは愛嬌がよくかっこよかったので、チェックインの時に「5日泊まるから26.46ユーロを25ユーロにしてください。」とにこやかに値切ってみた。言ってみるもんだ。ちょっとユーモラスに「No no no.」と言いながら、少数点以下を指で隠して「26ユーロならいいよ。」と言った。(たぶんそう言った) スペイン語の勉強を全くしていなかったから、怪しい英語とフランス語とウノ、ドス、トレース(スペイン語で123)をあやつるのだけど、とてもとても苦労した。たいていは身振りと絵に描くのが一番だ。はじめに覚えた単語は、やはりセルベツソ(ビール)とトルティーヤ(おいしい庶民料理)で、ブエノスディアス(こんにちは)より早かった。その時に知ったが、「オラ!」というのはとても便利な言葉である。「こんにちは」「やあ」「それじゃね」「あ〜あ(がっかり)」「バイバイ」など、抑揚を変えれば幅広く使える。



ホテルは、下がレストランなので便利だ。おいしいセルベツソを飲んだら、郷に於いては郷に従えで、何の違和感もなくごく自然にシエスタ(昼寝)の時間に突入した。



カンカン照りの太陽の下に昼下がりに出るのはかなり厳しい。夕方になってもまだ日は高いが、日陰はとても涼しいので散歩した。昨日リサーチしていた海岸まで行ってみた。



海岸へ向かう道には、海水浴グッズや南国らしい涼しげな衣類や小物を売っている店が並んでいる。綿の涼しげなワンピースが目に入り、その店で立ち止まった。ライトグリーンがいいかしら、思い切ってオレンジにしようかしらとあれこれ迷っていたら、店員さんらしい若い女の子がそばに来た。私が選ぶ様子を見ながら、にこにこしてサイズはこれがいいわと一緒に探してくれた。店内には、シックなデザインや奇抜な色遣いの服があって、見るのが楽しかった。その女の子の母親らしい人がいて、私たちの様子を優しそうな笑顔で見ている。「アリガトゴザーマス」とママが言ったので驚いた。日本語がわかりますかと尋ねたら、弟が大阪で働いていて3~4つの挨拶の言葉だけは知っていると応えた。知り合いが一人もいなくて、言葉も通じないところで、日本語を聞くととても嬉しい。それだけでその親子と心が通じ合ったような気がした。女の子はバルバラ、ママはアンナマリア。二人との出会いで心が安らいだ。綿のライトグリーンのワンピースを買って、その店を出た。



きつい日差しの中を1km位歩いたので、少し日焼けした。散歩の後、また下のレストランで夕食となった。パエリアとサラダとワインを注文した。あのお兄さんがフロアーを仕切り、上手にたくさんのお客をこなしていく。注文を取り、料理を出し、テーブルの間を気ままに歩き、また注文を取る。暇なときは、片隅に設けてあるテレビコーナーでビールを飲むお客と共にサッカー（ちょうどヨーロッパカップのクライマックスだった）を観戦する。軽いノリでしっかりと上手にフロアーを切り盛りするそのお兄さんの力量か、そのレストランは地元の人でいっぱいだ。パエリアは懐かしい味に思えた。自分の好みの味だった。そして、満腹したら例のごとくまた寝てしまった。



6/23~27 Llanca hostale Llanca 26€ 最終日は車中泊

6月24日「プレ地中海デビュー」（16日目）

どんより曇り空。リュックを背負って散策に出かけた。こちらの入り江からあちらの入り江まで、歩くこと1時間。途中買い物をしながらぼちぼち歩いた。入り江についてしばらくぼんやりとした。「これが地中海だ。」と思いながら辺りを見渡した。どこの入り江もたいてい日光浴を楽しむ人々がいる。まだちらほらだが、海水浴やヨット、ウィンドサーフを楽しんでいる。砂浜あり岩場あり。水は冷たい。向こうに見える入り江の絵を描いた。水筒に入れていったコーヒーをゆっくりと飲んだ。貝殻やシーグラスを拾った。そして、またゆっくりとホテルまで歩いた。午後2時、おきまりのセルベツソとトルティーヤに満足し、シエスタをした。スペインのシエスタは、体にとってとても重要であると思う。日本にもこの習慣があればいいなあ。



夕方は、とても涼しい。午後8時頃には日が傾き、テラスでも過ごしやすい。鳥の鳴き声がきれいだった。その鳥は、よくおしゃべりをする鳥で、フランスでも同じ声を聞いた。フランスでは「トレットレットレトレジョリー」と聞こえたけれど、スペインでは「トルティーヤトルティーヤ」と聞こえる。きっと同じ鳥に違いないのだけれど、おしゃべりが違う。中くらいの黒い鳥だった。何という名前なのだろう。



ホテルの隣は同じ系列のガソリンスタンドとコンビニだった。冷えたセルベツソを買ってテラスで夕ごはんを食べた。メニューは、特製サラダ。野菜たっぷり、チーズ、トマト、生ハム、オリーブ、ゆで卵。調味料は、岩塩。地中海を散歩したときに採取した自然のものだ。



6月25日「地中海デビュー」（17日目）

朝からゆっくりとテラスで朝食をとった。テラス側は、朝は涼しくていい。今日はいい天気になりそうだ。メニューは、卵スープ、クロワッサン、コーヒー。作業はお湯を沸かすだけだが、湯気が立つメニューがあるだけでとても豊かな気分になる。朝食と同時進行で弁当を作る。この手作りサンドが、我がケチケチ旅行の重要なポイントである。いろいろな風景を見ながら好きなときに食事ができるのは、とても楽しい。

今日はビーチで泳ぐつもりだ。新しい水着を着て、弁当と水筒の入ったリュックを持った。帽子をかぶった。ビーチサンダルを履いた。準備OKだ。まるで、子どもが夏休みに学校のプールへ行くときのようだ。もちろん、張り切って歩いた。バルバラの店の前を通りかかると、バルバラが店の前でぼんやりしゃがんでいた。笑顔で「オラ！（やあ）」と言ったら、とても嬉しそうに応えた。バルバラは高校生で、今は夏休みだからお母さんの店を手伝っているらしい。ジャンシャの隣駅の学校へ通っているそうだ。バルバラは、スペイン語のみで話すが、身振り手振り時々単語で通じるのが面白かった。怪しい会話を楽しんだ後、またビーチへ歩いた。



晴天で、日向はとても熱いから、岩陰に綿のシュラフを敷いて腰を下ろした。地中海にすぐにでも入りたかったけれど、とても冷たくてなかなか入れない。3、4回挑戦した。その入り江には、20人くらいの人がいる。みんなジャブジャブ泳いで楽しんでいるのに、私は意気地がない。東洋人は私だけで、何だか日本人代表になっているみたいだから、覚悟を決めて沈んだ。見ていた人は、きっと心の中で拍手したと思う。もちろん、その直後ぶるぶる震えて急いで上がった。



熱い太陽と涼しい風で、体はすぐにさらさらになった。日陰で涼みながら本を読んだり、ドミノをしたりし、暑くなったら、また地中海に足をつけた。昼食は、コーヒー、手作りサンド、チェリー、ポテトチップス。入江では、みんな思い思いの食材を持ち気軽に食べている。重箱弁当はないけれど、熟れたアプリコットやリンゴ、サンドウィッチやコーラを気軽に口に運ぶ。



昼下がり、ホテルへ戻ってシエスタをした。下のレストランで夕食を終え、部屋へ上がったら半月が出ていた。今夜は、星もたくさん出ていて、虫の声も聞こえる。涼しくて上着を羽織った。



6月26日「崖の小道」(18日目)

午前9時起床。日没が遅いから夕食も遅くなり、寝るのも遅くなるから起きるのも遅くなる。みんな朝早くから活動しているから、ヨーロッパ人は睡眠時間が足りないんじゃないかしらと思う。今朝は、特製のバター味の目玉焼きを作った。日本を発って以来、久しぶりだし大好物だしで感激だったけれど、初めて食べたスペインの卵の味は、爆発的な太陽みたいに強烈な濃い味で微妙...である。



今日もまた、例のごとく準備し、ビーチへぼちぼち出かけた。まさか、日差し嫌いで海のベタベタ嫌いの私が、毎日のようにビーチへ行くななんて思いもよらなかった。水は冷たく、上がると肌はさらさらしている。風は乾いて涼しいから、肌を思い切り出して日差しを浴びても気持ちがいい。少しいい色に焼けてきた。



土曜日だったせいか、昨日のビーチはいっぱいだったので、その先のビーチへ歩いた。途中で、紫のボールのようなかわいい野草を見つけた。シンプルで可憐なその花に目を惹かれた。とても見晴らしのよい崖の小道を歩いた。遠くの水平線や白い帆を張ったヨットを見ながらどこまでも歩いた。海側にテラスを構えた別荘地のような家並みが続いた。



着いた入江は、郷里の磯にそっくりだった。明日は必ずシュノーケルを買って潜るぞとつくづく思った。水は冷たくて、やはり入ることは難しかった。水のぬるんでいる入江で足をつけて、サンドウィッチとオレンジを食べた。コーヒーを飲んで少し休んだ。肌に当たる風が涼しくて、とても気持ちいい。



帰り道に夕食の食材を買った。今晚のメニューは、生ハムサラダ、パン、スープ、白ワイン。昼間は灼熱の太陽が取り仕切っているけれど、夜は涼しい風が吹いて肌寒いくらいだ。虫の声も聞

こえる。夜11時、まだ宵の口。外で過ごすのがとても心地よい。まぐれでLlamcaに来て本当に良かった。

6月27日「大好きなLlancaへ」（19日目）

残すところあと一日になった。あっという間に過ぎた感じがした。朝方4時頃目が覚めたが、もう一度寝たので起床は10時だった。あちこちで時を知らせる教会の鐘で目が覚めた。鐘の音は、15分には1回、30分には2回、45分には3回鳴る。丁度の時は派手に鳴り、その後に時刻の数だけ鳴る。



ゆっくりと朝食をとり、支度をして今日もまたビーチへ出かけた。昨日と反対側へ歩き、静かな入江を見つけた。大きな木陰に綿のシュラフを敷き、そこへ落ち着いた。



今日は途中でシュノーケルを買った。昨日までは、冷たいからって水に入れなかったけれど、マイシュノーケルを持ったら別人になった。冷たいのも忘れて、水の中へどんどん入って行った。



小さな色鮮やかな魚と一緒に泳いだ。ウニがいっぱいいる。貝はいない。フジツボもない。あとは郷里の海と同じだった。



木陰で涼しい風に吹かれながら、オレンジを剥いて食べた。その入江で遊ぶ家族連れを、ほほえましく見ながら絵を描いた。そして夕方、その入江をゆっくりと後にした。



初めてLlancaに来た日に座ったビーチのカフェに立ち寄った。冷たいセルベツソを飲みながら、思い出のビーチの絵を描いた。素晴らしい5日間に感謝した。明日Llancaを去るのかと思ったら、淋しい。気まぐれに立ち寄ったこの土地が、とてもとても思い出深い土地となり、再び必ずこの土地を訪れたいと思った。



6月28日「言葉の壁を越えて」(20日目)

Llanca (ジャンシャ) を発つ日が来た。ここを訪れた日からずっと仲良くしてくれたアンナマリア (母) とバルバラ (娘) にさよならを言いに行った。とてもかわいい服や小物を売っている店を営んでいる。二人に出会ったことは、Llancaが忘れられない土地になった大きな要因でもある。



二人は、スペイン語と時々フランス語、「ありがとう、おはよう、こんにちは」の日本語で、英語はほとんど使えない。こちらは、怪しいフランス語と身振りで話すしかなかった。それでも、気持ちは通い合うものだ。向こうもこちらも、お互いに近づこうとする気持ちがあったからだろうと思う。一緒に過ごした時間はとても楽しかった。夕べのうちに準備していたイラストとメッセージを描いたカードと和紙で折った鶴と風船を「un cadeau pour vous.」(あなたへの贈り物だよ)と言って渡した。とても喜んでくれた。バルバラからほっぺにキスもらった。アンナマリアと話していたら、自分のママのように思えた。記念に写真を撮った。アンナマリアがお礼にとYOKO (陽子) の頭文字Yの文字と皮で作った指輪をプレゼントしたいと差し出した。指にはめて、ありがとうのキスをしたら、涙が出てきた。みんな涙目になりながら、抱き合った。



Merci beaucoup. A bientôt. (ありがとう また会おうね)



6月29日「強烈な印象」(21日目)

Llanca (ジャンシャ) からcelebere (セレベレ) 行きの列車に乗り、そこでStrasbourg (ストラスブール) までの寝台夜行列車 (クシェット) を予約した。それからの待ち時間が長くて、閉口した。重い荷物で肩こりに悩まされた。眠いけれどゆっくり寝る場所がない。駅近くの地下道を通って外に出ると、真正面に海岸が広がった。意外だった。じっとりと暑い中、ベンチで少しうとうとした。駅の構内で、歩き回ったり肩こりの腕を回したりしながら、ずいぶん待った。



寝台車は快適だった。知らない人同士が上下左右で寝るのには、ちょっと抵抗があったが、体をのびし寝て移動できるのは素晴らしい。料金は、フランスレールパスがあったので、それに2000円位追加した。それで1000km以上も移動できるので、夜行列車はケチケチ旅行の味方である。たくさんの味方をつけながら、旅は無事に後半に差しかった。

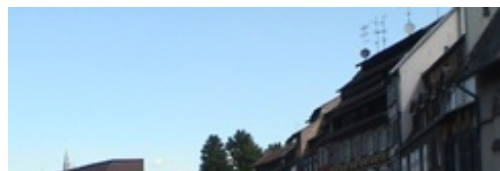
Strasbourg(ストラスブール)に着いた。インフォメーションでパンフレットを買い、それを見ながら行き先を考えた。まず、ホテルを決めなくてはならない。この町は観光名所で、☆のいっぱい付いたホテルが駅前の通りにずらりと並んでいた。高級ホテルは、日本のホテルとあまり変わらないから、☆の少ないホテルが面白いと思う。探しながら歩いていると、三つ星ホテルの合間に小さなホテルを見つけた。早速入ってみた。長いらせん階段が上まで続いている。エレベーターはもちろんない。一泊37.5ユーロ(約5000円)で、ここに決めた。重い荷物を最上階の屋根裏部屋まで運んだ。やはり、ギシギシ音がした。トイレは廊下。部屋にシャワーがある。奇跡的にテレビもある。明るく機能的な部屋だ。ここで二日滞在することにした。



身軽になり、ご機嫌で歩いた。とてもきれいな街で驚いた。プチフランス(世界遺産)の街並みは、とてもきれいだ。運河の両端に古い建物がそのまま保存され、レストランや小物の店になっている。窓や橋の欄干には色鮮やかな花があふれていた。しばらくその美しさに見入った。



運河を観光船が通る。段差を調整するところがあって、そこに入ると前後の門が閉まり、水位が同じになるまで水を入れながら待つ。船が徐々に上がり、進行方向の水位と同じ



になったら、水門が開く。その瞬間を乗客も見ている人もみんな楽しみに待っている。カウントダウンの心境だ。水門が開き始めた瞬間、拍手がわくかと思ったがわかenかった。本当は拍手したかったと思う。私は心の中でした。



サン＝トマ教会へ行った。に入った瞬間、パイプオルガンの音に捉えられてそのまま30分位動けなかった。そして、演奏している姿を遠くからでもよいから是非見たいと思った。意を決して受付の人に頼みに行った。親切な受付の女性は、担当の人に聞きに行ってくれたけれど、やはり無理で気の毒そうに断った。真剣にコンサートの練習をしているから、演奏風景をいちいち観光客に見せてたら大変だ。そう思ってあきらめた。パイプオルガンを聴いていると、強い力を感じた。何か自分に語りかけてくるようで、ぽろぽろと涙が出てきた。



250年前にモーツァルトが絶賛したという（手紙が残っている）そのパイプオルガンの絵はがきを買って、さっきの受付の女性にA bientot（また会いましょう）と言った。その女性も優しい笑顔でA bientotと言った。



安くておいしいサンドウィッチ屋を見つけた。川沿いの公園のベンチに座って食べた。夕方、プチフランスは、演奏の音と食事をする人であふれていた。私は、そこから離れた通りのレストランでゆっくりとケバブを食べた。



6/29～30 Strasbourg Hotel de Tourisme le Colmar 37.5€ 夜行列車泊あり

6月30日「贅沢なひととき」(22日目)

朝10時。真っ先にサン＝トマ教会に向かった。ラッキーなことに、今日もまたタダで生演奏が聴けた。今日はトランペットとパイプオルガンのデュオだった。これまで、トランペットとパイプオルガンのデュオはCDでしか聴いたことがなかったから、とても嬉しかった。



昼前までずっと聴いていた。その音を聴きながら、教会の中の絵を描いた。



昨日のサンドウィッチ屋へ行く途中にマルシェがあった。マルシェとなれば、お腹が空いてよろけそうなこともすっかり忘れ、あちこち意欲的に見て回るほど力が湧いてくる。きれいな色のスカーフとチェリーを買った。



公園の芝生に座って昼食をとった。温かいコーヒーがおいしかった。今日のサンドウィッチは、大好きなカマンベールチーズが入っていた。家庭的な味だし、本当に安くておいしい。明日も買おうと思った。



ヨーロッパに来るとき、大抵のものは用意してきたが、そろそろ石けんがなくなってきた。毎日のシャワーが楽しめる



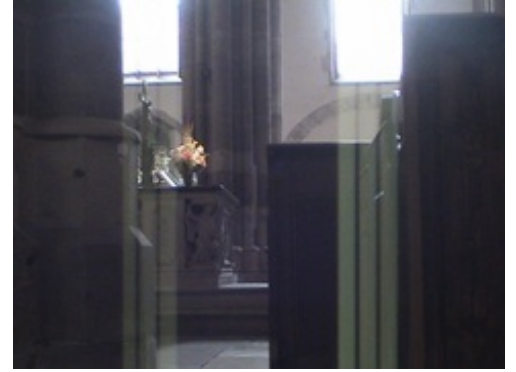
ように、いいにおいの石けんを探すことにした。それが、たかが石けんなのに、どこを探してもない。キャンドルはどこにでもある。似ているから、「あった！」と喜んで近づくとキャンドルだ。意地を出して探しまくった。ないと思えばますます欲しくなる。石けんを求めてさまよい歩いた。やっと見つけた。けれど、あまりに興奮しすぎて、決めた石けんと違う石けんを買ってしまった。ラベンダーが欲しかったのに、バイオレットを買ってしまった。仕方ない。その日は、バイオレットの香りに包まれて、ぐっすり眠った。



7月1日「Offenburgはいいところだ！」（23日目）

風が強く肌寒かった。スペインでへそを出していたことが嘘のようだ。

ホテルに荷物を預けて、今日もまた、サン＝トマ教会へ向かった。今日が7月の始めの日だと気づいたら、6月9日に日本を出発してからこれまでの20日間、無事に過ごせたことを今更に思い返した。教会で椅子に座り、じっと静かにした。心の中は、感謝の気持ちでいっぱいになった。



これから、ドイツのoffenburgに向かう。例の店でサンドウィッチを買って、ホテルで荷物を取り、駅へ向かうことにした。小さなホテルは、チェックアウトする時に何となくほのぼのとする。そのホテルのお父さんまたはお母さんにお礼を言ったり、気をつけてねと言われてたりしてお互いに笑顔になるから好きだ。



Offenburg行きの列車を待つ間に、ホームのベンチでサンドウィッチをかじった。温かいコーヒーはいつもおいしい。水筒を持って来て本当によかった。列車は、モノレールとそっくりだった。1両だけで可愛かった。約30分ほど走ったら、そこはもうドイツだ。Offenburg駅から通りをまっすぐ1km程歩いたところにインフォメーションがあった。そこでもらったパンフレットと地図を参考に歩き始めた。街並みはきれいだし、犬の糞も落ちていない。下に注意しながら歩かなくても大丈夫だ。



ホテル（民宿）は1泊60ユーロでいつもより割高だけれど、味のある家具と美しく煌びやかなシャワーとトイレにメロメロになった。もちろんはしゃいだ。ゆったりとしたベッドには大きなふかふかの枕があり、シーツは清潔でびしょと糊がきいている。お母さんも優しそうだったし、「この町は二日あれば十分ですよ」とインフォメーションのお姉さんが言っていたし、ここでの二日間滞在することにした



地図を見ながら散歩コースを決めた。散歩コースはたくさんあるし、ビアガーデンもある。いい街だなあと思った。湖まで歩き出したが、なかなか遠い。もう少しもう少しと思



ながら結構歩いた。川沿いを歩き、国道に出て陸橋の下をくぐり、サッカー場を越え、原っぱを通った。



湖はいろいろな遊具施設があり、子ども達の団体がわいわいと遊んでいた。その湖で夕方まで本を読んだりドミノをしたりしてゆっくり過ごした。



ドイツでビールとソーセージを食べると決めていたので、下のレストランへ行った。注文しようと思ったけれど、ドイツ語の「ソーセージ」がわからなくて困った。身振り手振り時々英語でようやく「Wenele (ヴィンナレ)」だとわかった。手帳に書いてもらったし、明日からはもう大丈夫だ。親切にしてもらったお礼に不織布の大判ナプキンで鶴を折ってそっと置いてきた。

7/1~2 Offenborg (ドイツ) Gasthaus Zauberflote (60) 電車

7月2日「幻のお酒」（24日目）

Post office（郵便局）で絵はがきを出した。天気あまりよくなくて、時々雨が降った。散歩コースはたくさんあるけれど、今日は遠出をしないことにした。スーパーを探してずいぶん歩いたけれど探せなかった。

あきらめて歩いていると、小学3年生くらいの男の子が、ソーセージをとオニオンソテーをはさんだおいしいそうなサンドウィッチを食べていた。それ、それ、それが食べたい！近づいてどこで買ったか聞こうと思ったけれど、怪しい東洋のおばちゃんが、藪から棒に迫ってきたら怖いだろうと思い、我慢した。まず、辺りを観察するのは個人旅行の基本である。落ち着いて見てみると、すぐ先に人だかりのある屋台があった。ほうらねって得意気になった。モチモチのパンにしんなりとソテーした甘いオニオンとパリッと歯ごたえのあるソーセージ。比類がないくらいおいしかった。



今日はあいにくの雨模様で、外には出られず、部屋でゆっくり過ごした。



夕方、下のレストランに行った。タベ折った鶴をカウンターの上に飾ってあった。オレンジと黄色のしゃんとした大きな鶴はなかなかの美術品に見える。きれいだと思った。お母さんも気に入って、もう一つ折ってくれとナプキンを持ってきた。二羽の鶴が仲良く並んだ。今日はお母さんのおすすめのサラダを食べた。野菜、豆類、ハム類、チーズ等の盛り合わせで、おいしくてボリュームがあった。こうしてお勧めを尋ねるの一番だと思った。

コーヒーを頼んだら、横に何やら飲み物が付いてきた。「シュナップスだよ。これを少し飲んでコーヒーを飲むとグーだよ。ためしてごらん。」と、お母さんはにこにこしながら勧めた。一口飲んだら、それがかなりおいしくて目が丸くなった。「これは何というお酒ですか。瓶を見せてください。」と、頼みにカウンターまでにじり寄った。サクランボのついた瓶だ。例のごとく手帳に書いてもらった。（Kirsch wasser キッシュヴァッツ）どこかで見たことあるような感じもした。けれど一口で虜になってしまうほどおいしいので、欲しいなと思った。重いし、ただでさえ荷物肩こりに悩む私が、日本までもって帰れるかどうか心配だ。断念しようと思っていたら、お母さんがかわいいハーフボトルを持ってきた。これなら持って行ける！と思った。お母さん

にありがとうと言った。お母さんも嬉しそうでお互いにほっぺにキスをした。

7月3日「ドイツからスイスへ」(25日目)

旅もとうとう残り一週間になってしまった。思えばこれまで、内容の濃い珍道中だった。残す時間は、スイスのMorges（これも勘で決めた）で過ごすことにした。一旦ストラスブールへ戻り、そこからBasel（バーゼル）へ行き、Morges行きに乗り換える予定である。



お母さんにさよならを言い、民宿を出たとたん、その辺一帯マルシェだった。今日は土曜日でマルシェが開かれる日だったのだ。通りの両側に店が並び、向こうの通りまでずっと続いていた。大興奮状態で居ても立ってもいられない。重い荷物をゴロゴロと引いて10歩も歩かないうちに、きれいなクラフトの店に足を止めた。



昨日ホテル近くの通りを見て歩いた時に、目を惹かれたクラフトだった。荷物が増えるのを嫌っていた私だけけれど、これは是非私の母に見せたい、意地でも持って帰りたいと思った。壊さないように日本まで必ず持って帰るぞと覚悟を決め、気合いを入れて3個買った。



列車の待ち時間の問題はなく、ストラスブールに着いた。Basel行きを探すが無い。同じ時刻でBale行きはある。しばらく探した。時刻表にはちゃんと載っているのに、なぜ無いんだろうと何回も確かめた。似ているし方向も同じだし、一か八か乗ってみた。私もかなり度胸がついてきたものだ。コンパートメントの同席の女性に聞いてみた。BaselとBaleは同じらしい。「そうですかぁ。」とほっとして笑った。



Baselからジュネーブ行きに乗るはずだったが、タッチの差で乗り遅れてしまった。惜しいところで、1時間の待ち時間となった。Baselはフランスからスイスに入った最初の駅で、結構大きな駅だった。午後5時41分にMorgesに着いた。ここ



もまた、行き当たりばつりに決めた場所である。とにかくレマン湖の方向へ歩いた。”



ホテルはなかなか目に入らない。まだまだ歩いた。レマン湖のほとりに出ると素晴らしい景色が広がった。正面に幻のようにモンブランが見えた。湖のほとりのホテルに泊まることにした。180スイスフラン（約16000円）で目玉が飛び出しそうになったが、これまで節約したから「メリハリが大事」と思い直し、この眺めを楽しめるそのホテルに決めた。



7月4日「アルプスの麓へ」(26日目)

今朝は、遙か向こうに輝くモンブランとシャンペンで贅沢な一日の始まりだ。



朝10時、レマン湖は帆船で活気づいていた。港には、たくさんさんのマストが並び、その向こうに鱗の瓦の街並みが見えた。おじいさんと孫娘がセーリングの準備をしている。かわいい孫にヨットの楽しみを教えてくれる優しいおじいちゃんだなと思った。



スイスは物価が高いから、今日のうちにChamonix (シャモニ) に行くことに決めた。Morges (モルジュ) からMartigny (マルティニ) まで列車に乗った。偶然にも日本人夫婦と隣り合わせになり、たっぷり日本語で喋りまくった。



私のスケッチブックの絵をほめてくれたので嬉しかった。お喋りしていたら、後ろの席の黒人の家族が横浜に住んでいたと言って話しかけてきた。辺りが和やかな空気に包まれた。日本人夫婦はとても優しくかった。イギリスで働いている娘の家に滞在していたらしい。

テニスやアジリティの話で盛り上がった。ちょうどウィンブルドンが開催されていて、その様子をいろいろと教えてくれた。小さなリンゴをもらいみんなでかじりながらお喋りをしていたら、あっという間に1時間半がたった。

Martigny (マルティニ) からChamonix (シャモニ) までの登山列車は、それはそれはすごかった。



約1時間半近くビッグサンダーマウンテンに乗り続けているようだった。1000mの谷底を見ながら断崖絶壁を登りに登った。右に左にと雪景色のアルプスの山々が見えてくる。キャーのあとはワァーオで、ワァーオのあとはキャーで、その繰り返した。



Chamonixまでの道中は忘れない。途中の駅で乗り換えたが、その駅にアルプスの少女ハイジに出てくるような水飲み場があって、急いでペットボトルに汲んだ。その冷たくておいしかったことも忘れない。



16martignyから chamonixへ向かう 列車から

Chamonixの駅に着くと、賑やかだった。観光客と修学旅行客があふれている。よく晴れていて、景色も最高だ。

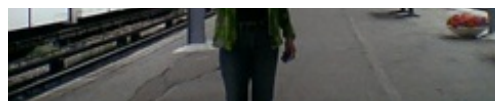


おきまりで、まず、インフォメーションへ行った。ホテルをいくつか紹介してもらった。行ってみたが、なかなか空いていない。3軒目でやっと決めた。スペインとは比べものにならないが、52ユーロ（約7000円）でまあまあだ。部屋は木造できれいだし、設備も整っている。窓からはアルプスが見えるし、ここで3日間滞在するのが楽しみだ。

夕方散歩した。明日行きたいLe lac blanc（山の湖）のリサーチだ。ロープウェイ乗り場で時間帯や場所、料金などを調べた。

明日は天気がよければ、les praz（レ・プラ）駅まで行き、ロープウェイで1800m地点まで登り、それから徒歩で2358mの山の湖Le lac blancへ向かう。明日の展開を楽しみにしながら準備した。

日本から持ってきた米3合の最後の1合を炊いた。いよいよケチケチ旅行が終わりに近づいたことを実感した。



7月5日「困難に負けない気力」(27日目)

早朝からle lac blanc山の湖へ出発する支度をした。標高が高いし、危険も考えられる。登山の装備はなく、ウィンドブレーカーとスニーカーで行く。閉所や高所が苦手の私は、昨夜からややパニック症候群である。下痢と息苦しさがなかなか眠れなかった。しかし、やはり山の湖を見たい一心がエネルギーとなり、体調が回復した。



持ってきた服を工夫して防寒に備え、チョコレートやビスケットの予備食、弁当、温かいコーヒーなど、もしものことを考え真剣に準備した。だいぶヨレヨレになった帽子をしっかりとかぶって出発した。



途中、以前から欲しかった携帯ストックを買った。これは、優れもので、一日中私を助けてくれた。

Chamonixから一駅目のle prazまでは電車で行き、そこからロープウェイで一気に900m程(1894m地点へ)登った。そして、石ゴロゴロの絶壁を登りに登って2358m地点のle lac blancを目指した。何度か小休止した。足場のよいところで、腰を下ろし、温かいコーヒーとビスケットを食べた。

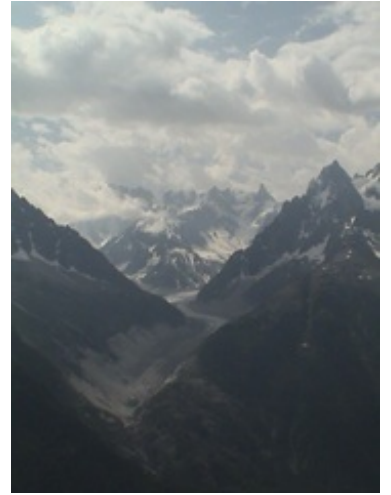


15分くらいかけて絵も描いた。

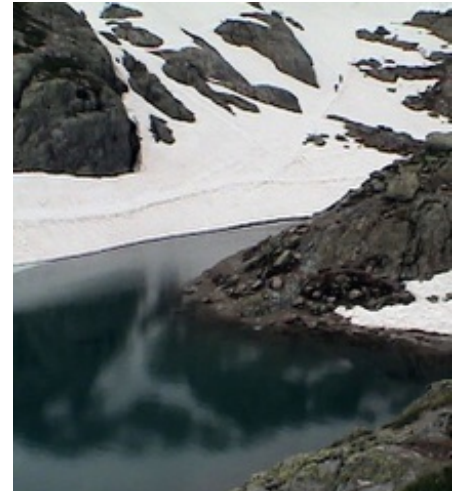


その頃から曇り始め、やがてぽつぽつ降り出した。頂上付近で本降りになった。まだ目的地は見え、どこまで登ればよいかもわからないまま、ひたすら登った。ほかの登山客も足を速め、湖を目指している。標高が高くなり息が苦しくなってきた。ここから簡単には逃げ出せないと思ったら、気が遠くなりそうだった。口も開かず黙々と登った。

雨は冷たく、ウィンドブレーカーの中にしみてきた。帽子もぐっしょり濡れている。リュックの中のスケッチブックが気になった。これまで描き貯めてきたスケッチがにじんでしまうのじゃないかと心配になった。スケッチブックに描いたシーンが頭の中を駆けめぐった。「この夢も叶えよう。あきらめず、必ず山の湖を見よう。」そう思ったら、気合いが入った。リュックの上にウィンドブレーカーを羽織った。雨はますます冷たくなり、雪道が現れた。スニーカーが滑らないように、ストックを使って、一步一步ゆっくりと確かな足取りで湖へ向かった。最後の傾斜は更に急になった。息も荒く速くなった。「負けないもん。」と独り言を言いながら、一步一步踏みしめた。



Le lac blanc (山の湖)が見えた。素晴らしい青だ。雪の白とマッチしてとてもきれいだった。ほっとするのもつかの間、本格的な雨に山小屋カフェには、人が押し寄せている。冷たくて寒くて、雨宿りもできずに困った。体をよじり小さくなりながら山小屋へ入り込んだ。軒下も入り口も部屋の中も満員だ。微妙に体をひねりながら濡れた上着を脱ぎ、日よけ用に持ってきた手袋をとり、リュックを下ろした。みんな同じ状況だから我慢するしかない。山小屋の中には、長いすと長テーブルがいくつもあり、それを囲むように座っている。しばらくしたら席が空いた。雨はまだ止まないが、先に来た人たちの心遣いである。みんな少し休んだら席を譲り合った。感謝しながら長いすに座り、弁当のサンドウィッチを食べた。ほっとした。隣の人と言葉は交わさなくても、目を合わせてにっこりとほほえみを交わした。ココアの温かさがお腹にしみ、体を温めた。



しばらく休んで、下山した。



途中、雨と雷に肝を冷やした。下りはあまり息も切れず、ペースもずいぶん速かった。途中、ちょっと冒険をしたくなり、岩山の道を通ることにした。遠くから見ると小さな石ころに見えたのだけれど、近くに行ってみると2～3mはある岩が連なっていた。途中まで進んで、やはり引き返そうと振り向くと、引き返すことが難しいくらい険しかった。足がすくんだが、進むしかない。覚悟を決めて岩から岩へ慎重に進んだ。前だけを見てがんがん進んだ。



岩の道をクリアした。満足である。振り返ったら、気が遠くなった。よくぞこんなところを来たもんだと自分でも感心した。充実した時間だった。山を後にするとき、小さく「バイバイ。」と言ったら、涙が出てきた。思いもよらない登山体験からメッセージをもらったような気がする。山あり谷ありの人生であっても、困難に負けない気力で乗り切ることが、私にもできる。



山小屋（山の湖）での1シーン

「ママの弁当」

冷たい雨と寒さから逃れ、山小屋の席に腰を下ろしほっとした。やおら弁当を開き始めると、隣の兄弟らし男の子二人が私のサンドウィッチに興味津々である。私は、その子供達のママの弁当に興味津々だった。私と同年代くらいのそのママは、夫と小学校高学年位の子ども二人の家族4人で登ってきたようだ。こんな険しいところへ子どもを連れてくる親は素晴らしいと思った。そして、更にそのママの弁当に感心した。ヨーロッパに来て初めて見る手作り弁当だ。大きなタッパーに人参の千切りが山ほど入っている。たぶんどレッシングで和えていると思う。その上に乱切りのトマトとゆで卵が無造作に入っている。みんな、タッパーから好きなだけ小皿に取り、タッパーを次の人へ回した。ママは、ナイフを使ってパン、サラミを切り子ども達に渡した。単純な弁当だけれど、おいしそうだし体に良さそうだし、見ていて温かいものを感じた。その兄弟は、東洋人の私に緊張した様子もなく、自然に目を合わせて笑った。弁当のトレードを申し出ようかとさえ思うくらい、親近感を感じた。ママは、次にシロップたっぷりのパンケーキを出した。とてもおいしそうだ。パンケーキを焼くママの姿が思い浮かんできた。兄弟が、屈託がなく明るいのは、このママの料理で育っているからかなと思った。男の子は、温かいココアを飲みながら、「あちっ」とおどけて見せた。辺りが和やかな雰囲気包まれた。小屋を出た。後から出てきた兄弟は、「オーイ」と言いながらこちらに両手をあげて振った。可愛いなと思った。そして、私も手を挙げて微笑んだ。山を下ってからも、その兄弟の笑顔は心に残った。

7月6日「強い思いは叶う」(28日目)

今日は、モンブラン方向のロープウェイで登ろうと思い、弁当を作って準備した。プラム、リンゴ半分、夕べの残りで朝食をとり出発した。



途中、ナイフの店に立ち寄った。さすらいのキャンパーにとっては、あこがれのグッズである。マイナイフが欲しくて、店員の女性に四苦八苦しなから、名前が彫れるかと聞いてみた。すると、少し困って「ボスが明日来るから、明日なら彫れる。」と言った。明日chamonixを出発するが、時刻はまだ決めていなかったの、頼んでおくことにした。そうしているうちに、ラッキーなことにふらりとボスが現れた。その場で、すぐに彫ってくれた。安くて小さいナイフだったけれど、彫ってくれた。まるで、「ティファニーで朝食を」の1シーン「ティファニーのお店で、お菓子のおまけの指輪に名前を彫ってと頼むシーン」みたいだなと思った。嬉しかった。



モンブランへのケーブルカーは、7月中旬まで動かないらしい。あと一週間後くらいだろう。仕方なく、反対側の山のゴンドラでplan praz (プラン・プラ) から頂上のle brevent (ル・ブレヴァン) へ登ることにした。今日は、昨日と違ってケーブルカーとロープウェイで登る。途中で雲がかかり、しばらく登るのを見合わせて昼ご飯にした。



最上のLe brevent (ル・ブレヴァン) へ登った。途中は雲の中だった。風が強くて飛ばされそうだった。とても寒くて、手がかじかんだ。谷底を見て、足がすくんだ。こんな地形がよくできたものだ。山小屋で温かいココアを飲んで、体を温めた。



ロープウェイで下る途中に、向かい側 (モンブラン側) に



滝が見えた。あれは、山から下り落ちる氷河の水だと思ったら、行ってみたいと思った。ロープウェイを降りて、その方向へ黙々と歩いた。なかなか川が見つからない



遠くに見える滝をたどりながら、ひたすら歩いた。土手に上り、林へ入り、音のする方へ耳を傾けながら歩いた。そして、見つけた。氷河の水の川。冷たくて透き通っていた。手を洗い水を飲んだ。そして、しめった林を歩いた。足下は枯れ葉の絨毯でふかふかだった。人の通った跡のある道をたどり、広い道路へ抜けた。願いが叶って嬉しかった。あの濁流の氷河の水を透き通った清水にしてしまう森はすごいと思った。



7月7日「氷河の滝」(29日目)

そう言えば、今日は七夕だ。Chamonix(シャモニ)からParisに戻る。星はAusterlitz(オステリッツ)行きの寝台列車の中で見ることになるなと思った。ゆっくりと朝ご飯を食べ、荷物の詰め方を考えながら荷造りをした。残すところ2日になり、荷物の整理も必要になった。

夜行に乗るから、急ぐことはなかった。適当な時刻の列車に乗ろうと駅へ向かった。

いよいよヨーロッパともお別れだから、最後に愛しのアプリコットを買った。旬の果物で、甘くて食べやすい。旅のお友にぴったりである。リュックの中には、いつも何某かの果物があった。時にはシェリー、時にはアプリコット、時にはネクタリンと安くて豊富な果物を楽しんだ。本当によい季節にやって来たものだ。



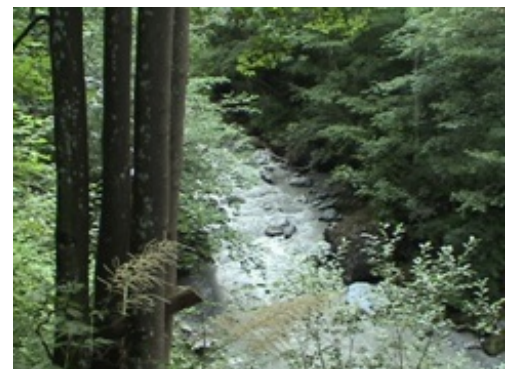
Chamonixを出る前に、St Gervais(サン・ジェルヴェ)午後9時8分発の夜行列車のクシェット(寝台車)を予約した。フランスレールパスはあと1回になった。最後の一回は、シャルルドゴール空港行きに乗る時に使うつもりだ。

St Gervaisで8時間ほど待ち時間がある。コインロッカーは、テロ対策ですべて閉鎖されていた。重い荷物を持って観光するわけにも行かず途方に暮れた。



仕方なく、ゴロゴロと荷物を引いてその辺りを散歩した。通りの向こうに公園が見えたので、そちらに歩いた。雨が降りそうな天気だったが、だんだん晴れてきた。芝生の公園で木陰を見つけ、寝ころんでいたら少しうとうとした。

また公園の奥まで歩いた。青白く濁った氷河の水がすごい勢いで流れている川沿いのベンチに座った。時間はたっぷりあるし、コンロを出してお茶を入れた。川沿いに登っていく人々の後について行ってみた。すると、100m程登り上がったところに氷河の水の滝があった。Chamonixで探し求めていた氷河の滝を見ることができた。嬉しかった。水は青白くすごい勢いで落ちていた。



夕方、また、駅までゆっくりと戻り、列車が来るまで、駅のカフェで待った。

7月8日「オルセー美術館・ドネルケバブ」(30日目)

Austerlitz駅に早朝6時に着いた。まだ半月が出ている。ホテルを探すにはまだ早いし、駅のカフェで甘いパンとコーヒーの朝食をとった。Metro(地下鉄)でl'Est(パリ東駅)へ行き、北駅まで歩いた。北駅まではえらく急な階段を上った。巨大化した荷物を一生懸命に抱えた。

北駅近くには、たくさんホテルがある。しかし、やや怪しいのであまりおすすめではない。一泊44ユーロでトイレもシャワーもあった。チャンネルを変えられないテレビもあった。



オペラ座まで最後の両替に行った。たったの50ユーロ(約7000円)で行列に並んだ。日本人の若い女性二人組が、何百ユーロも現金に換えているのでとても手間取った。そんなにたくさん現金を持ったら危ないから、クレジットカードにすればよいのにと考えた。待っている間、二人で大きな声で会社の上司の悪口かなんか話してる。しばし、日本人であるのが恥ずかしくなった。

コンコルド広場まで歩いた。Or'say(オルセー)美術館でモネ、ドガ、ゴッホの作品を一生懸命に鑑賞した。若い頃の作品から晩年の作品まで比べながら見た。いろいろな人生を送る中で、作風が少しずつ変わっていくのがわかった。夢中になって見ていたら、足が疲れて棒になった。



足が痛い上に腹ペコでシャンゼリゼを歩いた。通りは、独立記念日の凱旋の準備が進んでいた。凱旋門付近は、大混雑でうんざりした。凱旋門に着くと、すぐにホテルに向かって折り返した。久しぶりにドネルケバブを買ってホテルに戻った。





ほっとして静かになったら、夕べの列車で遅くまで外を眺めたことを思い出した。流れる景色を眺めながら、30日間のことを振り返り、無事であったこと、素晴らしいものを見たり素敵な人に出会ったりしたこと、友達ができたことへの感謝の気持ちでいっぱいになったことを思い出した。いよいよ明日帰国する。

7月9日「パリ北駅」(31日目)

私の旅はパリ北駅のこの場所から始まった。
そして、最後の日、またここに来てみた。



エピローグ 「このフライトが新しい私の始まり」

気持ちを引き締めて、シャルルドゴール空港へ向かった。



大韓航空はターミナルCだ。駅はシャルルドゴール空港②で降りる。雨模様だし、早めに行って空港で時間つぶそうと考えた。結局荷物を預けることができず、荷物を持ったまま5時間ほど過ごすことになった。マクドナルドで昼食をとった。



1ヶ月ぶりに氷の入った飲み物を飲んだ。最後の日なのに、待ち時間が長くてがっかりしていた。しかし、これまでのことを十分に振り返ることができた。これからのことも考えた。たぶん帰国したらゆっくりと振り返ることはできないだろうから、結果的によかったとつくづく思った。いよいよフライトの時間になった。

ヨーロッパにさようならをすると、いよいよ自分の新しい人生の始まりのような気がした。「またね。」と心の中で言った。



約10時間程の格闘の末、incheon seoul（ソウル）に着きほっとした。トラブルもパニックもなかった。あと1時間ほどで我が家に帰り着く。 （了）

女50歳で婚前旅行へ・・・ 続く

25年間勤めた小学校の先生を辞め、離婚し、勢いで有限会社を起こして5年。

私は、2004年の個性的なケチケチ旅行をまた始めた。今度は、新しいパートナーと一緒に。相変わらずユニークな日程で、七転八倒のヨーロッパケチケチ旅行が始まる。

さて、どうなることやら・・・

